

第27回地域医療現地研究会に参加して

「北の大地における地域包括医療・ケアの推進」

～国保診療施設の役割を考える～

<北海道・鹿追町／本別町>

国診協地域医療・学術委員会委員／長野県・佐久市立国保浅間総合病院技術部長兼歯科口腔外科医長
奥山秀樹

はじめに

平成25年7月5日（金）、6日（土）の2日間にわたって、北海道鹿追町と本別町において、国診協の第27回地域医療現地研究会が開催された。

例年5月に開催される現地研究会だが、北海道の良い季節にということで7月上旬の開催となった。しかし当日はあいにくの曇り空で、時々雨も降るという天候となってしまった。広い北海道という地域特性のある中で地域包括医療・ケアの実践を学ぼうと、全国の各国保直診・国保連合会から230名の皆さんに参加いただいた。

今回の研究会は、例年同様1日目の7月5日の午後から2日目の6日午前中までの開催であった。1日目は帯広駅近くのホテル日航ノースランド帯広で開講式と施設概要の説明があり、その後5台のバスに分乗し、鹿追町国保病院と鹿追町トリムセンターおよび本別町国保病院と本別町総合ケアセンターの施設視察研修を行った。夕刻からは同ホテルで地域医療交流会が開催された。2日も同ホテルで全体討論が行われた。

前日から参加されている方も多く、1日目の午前はおブショナルツアーが企画され、64名の皆さんが近隣の観光施設をまわった。

研修1日目 - 7月5日(金)

前日の7月4日に帯広に入り、当日は10時より国診協の地域医療・学術委員会に出席した。来年度奄美大島で開催予定の第28回現地研究会についての報告と来年1月の地域包括医療・ケア研修会の内容について協議を行った。

【開講式】

午後12時15分からホテル日航ノースランド帯広で開講式が行われた（写真1）。まず国診協の青沼会長より、国の社会保障と税の一体改革・高齢者医療制度に注視していく必要があること、地域包括ケアの充実への要望、都市部での地域包括医療・ケアの推進などについて開会挨拶があった（写真2）。

次いで、本別町副町長の砂原勝氏より歓迎の挨拶、その後、来賓として厚生労働省保険局国民健康保険課の中村博治課長と北海道知事の高橋はるみ氏の代理で北海道十勝総合振興局長の高橋博行氏のお二人より挨拶をいただいた。

続いて、視察研修施設の概要説明があり、鹿追町国保病院事務長の渡辺利信氏より、鹿追町の概要と鹿追町国保病院および鹿追町トリムセンターについて説明

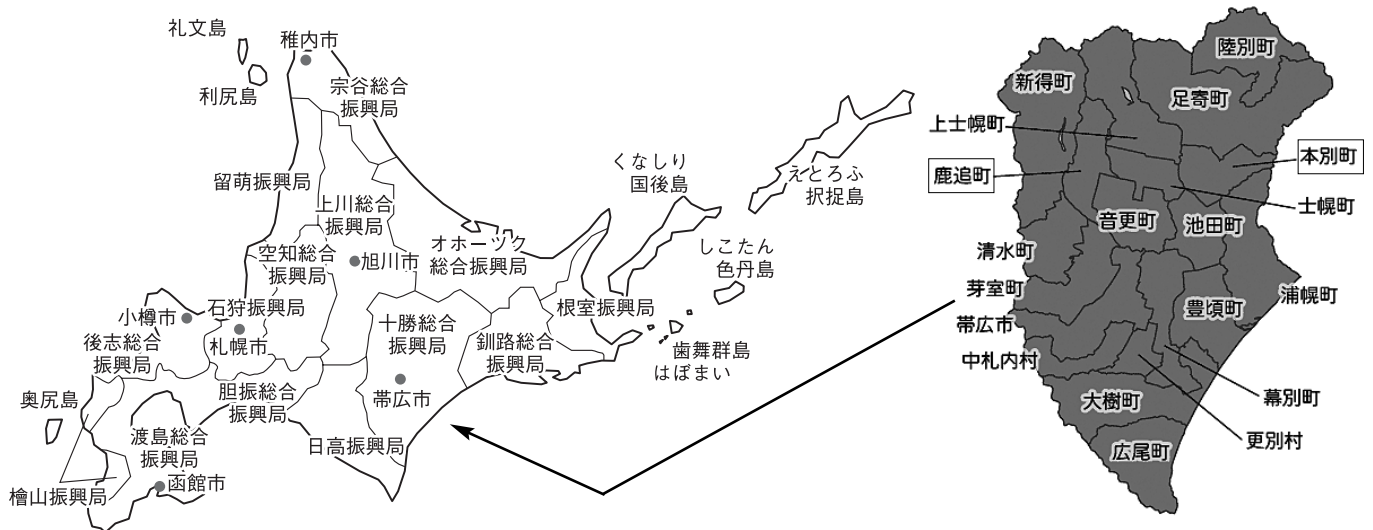


写真1 開講式



写真2 開講式で挨拶を行う青沼会長

図 北海道と十勝の位置



があった。引き続き、本別町国保病院事務長の毛利俊夫氏より、本別町の概要と本別町国保病院と隣接している総合ケアセンターについての説明があった。

鹿追町は北海道の中央下部、十勝平野の北西端、大雪山の東山麓に位置し、農業と観光を基幹産業とする人口5,575人の農村地帯である。観光では大雪山国立公園唯一の自然湖である然別湖しかりべつこを有し、年間70万人以上の観光客が訪れている（図）。

鹿追町国保病院は昭和26年7月13日に開設され、現在の病床数は50床（一般23床、療養27床）透析が6床。職員数は60名、常勤医師2名。入院患者は平均44.1名、ベッド稼働率88.2%という状況である。外来患者数は1日94名、診療日は月曜日から金曜日と第2土曜日

診察を行っている。

鹿追町トリムセンターは町民の健康と福祉の拠点として、町民の声を拾い建設された。センターの機能としては、住民の健康保持と増進を図る保健部門、高齢者を含めた福祉全体を担当する部門、健康増進のための体力づくりの3つの部門が連携している。

本別町は十勝の東北部に位置しており、面積の半分以上に山林が広がる町で、面積は391.99平方キロ、利別川水系がつくり出した河岸段丘に農地が広がっている。かつては林業が盛んな地域であったが、現在は農業と工業を中核とした産業構造になっており、特に地場産品の加工工業が発達している。平成25年3月末の人口は7,888人である（図）。



写真3 鹿追町国保病院

本別町国保病院の開設は昭和25年5月、許可病床は一般病床60床、透析は22床という状況である。職員数は106名で、うち正規職員が60名である。24年度の入院患者数は1日平均49.6名、病床稼働率は82.7%、外来は一日平均で252.1名である。常勤医師は現在5名で、非常勤医師については常勤換算で1.6名の状況であり、医師の充足率は97.7%である。平成12年に市街地から数キロ離れた地域に病院の改築に合わせ、保健医療福祉の統合を目指し、拠点施設としての国保病院、総合ケアセンター、民間の介護老人保健施設80床を整備している。これらの施設はすべて廊下でつながっている。

総合ケアセンターには福祉部門の介護保険、高齢者福祉、障害者福祉部門がある。その他、居宅介護支援事業所、地域包括支援センター、社会福祉協議会を含めた6部門が業務に当たっている。利用者は1か所に来れば、すべての手続きが行えるようになっている。

【施設視察研修】

施設見学はバス5台に分乗して行われた。私たちのグループはまず鹿追町へ向かった。車内では町役場の職員の方から鹿追町のビデオを見せていただき、車窓からの風景も楽しませていただいた。

鹿追町国保病院に到着し院内を見学した(写真3)。常勤医は2名でありながら、非常勤医師による専門外来を多数開設しており、町民の医療ニーズに答えている。その後、医療機関連携型高齢者住宅を外から見学



写真4 神田日勝美術館



写真5 トリムセンター

しながら、隣接しているトリムセンターに向かった。途中、戦時疎開で鹿追町に移住し、営農のかたわら油彩画を制作、32歳で夭折し、没後具象の画家として美術史上に定位される神田日勝の代表作と素描・遺品を常陳する神田日勝記念美術館を見学し(写真4)、廊下伝いにトリムセンターに行った。

トリムとは、ノルウェー語で船のバランスをとるという意味であり、そこからトリムセンターはバランスのとれた健康づくりと体力づくりの施設ということであった。早川由樹子保健師からスライドで、ママパパ教室や食生活改善推進協議会の活動、フィットネス教室など、センターの概要を説明をいただき、施設内を見学した(写真5)。

その後、鹿追町を出発したバスは道東道高速を西に



写真6 本別町国保病院



写真8 総合ケアセンター



写真7 透析室



写真9 筆者と元気君

進み、本別町に向かった。この時も車内で本別町について町役場の方からお話をいただいた。ビデオは故障していたが帰りのバスで拝見し、「豆のまち」本別町のことがよく理解できた。

本別町国保病院は広大な敷地の中にある病院で（写真6）、平成12年に町の中心部から数キロ離れた「太陽の丘」に移転した。まず、透析室に案内いただき、臨床工学士の方にお話をいただいた（写真7）。透析は22床あり、この地区の透析患者を一手に診療してきたが、他に透析施設ができ、徐々に患者数が減少したとのことだった。また、放射線科にはCTだけでなくMRIも稼働していた。常勤医5名で日常の診療をしながら、鹿追町国保病院と同様に小児科・精神科・眼科・整形外科・泌尿器科・脳神経外科の専門外来を設け、町民の

医療需要に応じている。

地域に開かれた病院づくりを目指し、町民医療講座「いざよいの会」を開催したり、病院運営モニター会議を開催し、病院ボランティア活動も行っている。また本別中央小学校5・6年生を対象に講演会を開催したり、医療体験を実施している。

その後、病院に併設されている本別町総合ケアセンターに向かった。そこでは高橋正夫町長にご挨拶していただき、飯山明美保健師からお話をいただいた（写真8）。「福祉でまちづくり」宣言をし、1万人の町民が家族のような地域包括ケアシステムを実践している様子を教えていただいた。また、町のゆるキャラの「元気くん」が迎えてくれた。「元気くん」は豆をイメージしたゆるキャラで、一緒に写真を撮ってもらった（写真9）。



写真10 交流会で挨拶される富永常任顧問



写真12 全体討議



写真11 交流会でのアトラクション



写真13 発表者

[地域医療交流会]

1日目の夜には、恒例の地域医療交流会がホテル日航ノースランド帯広で開催され、217名が参加した。国診協の富永芳徳常任顧問より開会の挨拶があり（写真10）、引き続き、北海道国保連合会の石子彰培理事長より歓迎の挨拶があった。その後、鹿追町の吉田弘志町長の音頭で乾杯し交流会が始まり、北海道十勝産の食材を使用した料理に舌鼓を打ちながら、アトラクションとして本別駒おどり保存会こども駒おどり少年団による「郷土芸能本別駒踊り」が披露された（写真11）。

その後、全国から参加した国保直診の皆さんが熱く地域包括医療・ケアについて語り合っていた。最後に北海道国保診療施設連絡協議会の小西裕彦副会長より閉会の挨拶をいただき、散会になった。

研修2日目 - 7月6日(土)

[全体討議]

2日目はホテル日航ノースランド帯広で午前9時より、「北の大地における地域包括医療・ケアの推進」～国保診療施設の役割を考える～をテーマに、全体討議が行われた（写真12）。北海道国保診療施設連絡協議会副会長で黒松内町国保病院長の秀毛寛己先生に座長を務めていただき、鹿追町国保病院の白川拓院長と本別町国保病院の一条正彦院長より発表があった（写真13）。

白川先生からは「包括ケアシステムの確立が地域社会の活性化に繋がる」というテーマでお話をいただい

た。鹿追町国保病院の医療と保健・福祉の連携の取り組みについて解説していただいた。地元でも専門医の診療を開いてほしいという要望が強く、専門医外来で小児科は週に1回、呼吸器内科、眼科が月に2回、泌尿器科、循環器内科、脳神経外科が月に1回診療している。医療と保健福祉部門が連携し、住民に安心、満足、幸福を提供することを目指している。

2003年に諏訪中央病院の鎌田先生をお招きして地域医療講演会を開催し、また、院内の待合室を利用して公開医療講座を定期的で開催している。国保病院の役割は「地域包括ケアシステム」を確立することであり、それにより地域経済の活性化につながる効果があると述べた。

さらに国の医療政策について、医療費亡国論に基づく医療費抑制政策を批判し、公立病院改革ガイドラインも中小病院に打撃を与え、地域医療の崩壊をもたらしたと述べ、社会保障を重視した「福祉国家」を目指すべきであると述べた。

一条先生からは「本別町国民健康保険病院の現在、未来の役割を考える」というテーマでお話をいただいた。保健医療福祉の統合を目指し、市街地中心部から2キロ離れた「太陽の丘」の中核として国保病院があり、その概要について解説していただいた。本別町は人口が減少し、かつ高齢化が増大するという状況の中、平成47年には高齢化率が50%を超えると予想されている。

国鉄池北線が廃止され、町民が帯広などの基幹病院へ通院するのが困難になった。一方、本別町内では太陽の丘循環バスが運行するようになり、太陽の丘へのアクセスは良好になった。こうした中、町民に医療に対するアンケートを実施した。その結果、専門科設置や救急体制の維持という国保病院に対する期待が大きいことが明らかになった。そのアンケートを受け、施設視察研修でも記述したように、徐々に専門外来を設置している。

今後の課題として医師・看護師・医療技術者の人材確保が重要であるとし、本別町子どもたちが将来、医療



写真14 全体討議の座長と助言者

関係に進むように、医療に親しむ授業などを実施している。また、若年人口の減少に伴い、家庭介護力が不足し、介護老人保健施設や老人ホームが十分でない現状もあり、医療介護の将来に不安があると述べていた。

その後、会場参加者からの質問や発表者から追加発言があり、中山間地域での地域包括医療・ケアのあり方について議論を深めることができた。広大な地域で医療資源の少ない中での地域包括医療・ケアの実践について称賛の声が多かった。最後に、厚生労働省保険局の中村博治国民健康保険課長と国診協の赤木重典副会長から助言とまとめがあり、有意義な全体討議が終了した(写真14)。

続いて閉講式があり、次期開催地の奄美大島がある鹿児島県の国民健康保険診療施設連絡協議会会長の川添健・長島町長より挨拶があり、最後に押淵徹国診協副会長より閉会の挨拶があつて、2日間の日程を終了した。



今回の現地研究会では、地域包括医療・ケアを実施していく中で、人口減少および超高齢化が進む中山間地域での地域包括医療・ケアのあり方とその重要性を学んだ。全国からの参加者は、それぞれの地域での包括医療・ケアを実践する上で、今回の現地研修会で学んだことを心に刻み、明日からの活動に取組む決意をし散会した。